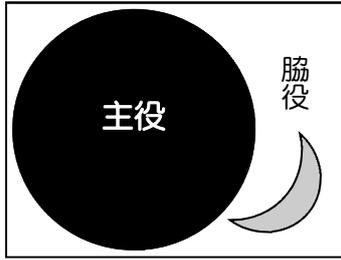
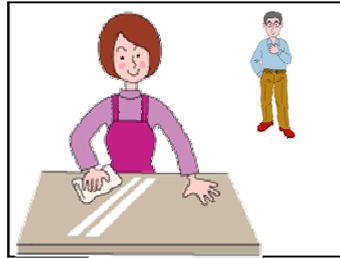


# 構図は主役と脇役のバランス



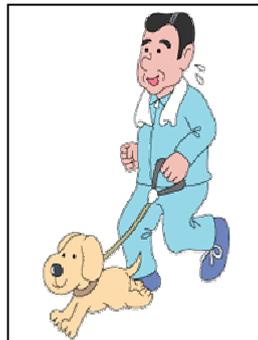
構図は、左図のように主役と脇役をハッキリさせることです。

画面の四隅までしっかり見つめて余分なものが入っていないか確かめましょう。



最初はなかなか上手くいかないかもしれませんが、慣れてくると素早く構図することができるようになります。

写真が上手くなってくると、背景の整理や色などにも気を配ることができるようになります。また、構図した空間の扱い方も上手くなってゆきます。



それには、練習が大切。そして継続することが必要です。

デジタルカメラは、何度でもどんどん撮ることができます。その中から気に入ったものだけを残せば良いのです。

**良い写真とは、中途半端な構図ではなく、大胆に空間を切り取ること。**

「これでいいや…」ではなく、「これだよね…!」という気持ちで撮ること。

初めてのことに挑戦することは、山登りに例えることができます。最初はとてもきつく、森の中で何も見えませんが、なんとかマイペースで登っていくと、やがて展望が開けます。そこには爽快感があり、山頂が見えるとさらに勇気が湧いてきます。無理をしないで、ゆっくり登れば山頂へは、必ず到達できるのです。もちろん、写真も。

良い構図の写真には、バランスとリズムがあり、そして、その写真はタイミングという時間的な空間でもあるのです。

道端に咲く綺麗な花があっても、気づく人と気づかない人がいます。気づくに相応しい速さが必要ですし、何よりも「気づこうとする心」が大切です。

**第一に「気づく心」、第二に「整理すること」、そして第三に「思いやり」です。**

構図をどうするか?というのは、この「気づくこと」と「整理すること」なのです。

# 構図が決まると露出も決まる

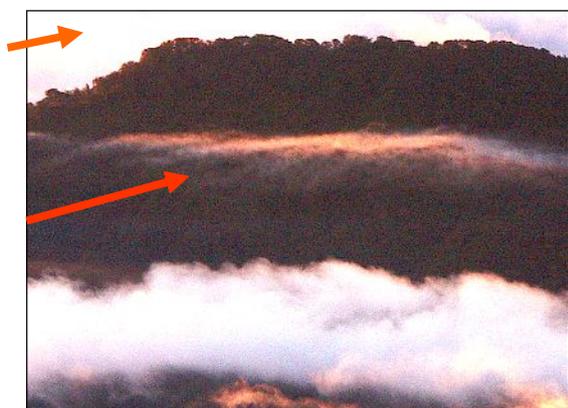
[ テキスト P58 - 61 ]



ファインダーまたは液晶モニターで画面を決めることをフレーミングと言います。同じようにこれと考えながら行うことを画面構成と呼ぶことにします。そして、出来上がった写真の画面構成を構図と本来呼んでいます。

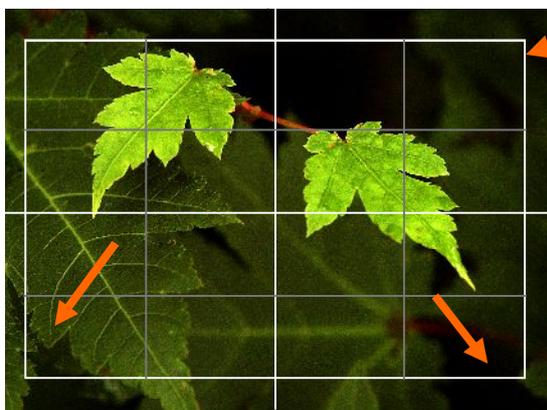
さて、左の写真は、山の中腹から朝焼けの雲海を撮影したものです。明るい雲の配分が多いため、明るく感じます。

**フレーミングをどうするか? で露出が左右されます。**



この写真は、望遠レンズで白い枠の部分を取り切ったものです。上の写真と同じ露出で撮ると、とても暗い写真になってしまいます。それは見ての通りで、黒い(反射が少ない)部分が多いからです。

そこで、左の写真は、かなり明るく(+補正)して撮影したものです。その結果、黒い山の上にある雲が白飛びになっていて、画像データがない結果となりました。しかし、**表現したかったのは、黒い山のところにある薄い雲**ということと、山を大きく配分したことによって成立した画面構成です。



この枠は、あえて付け加えてみました。絵柄(被写体)がこの枠から外れないようにします。

空間描写と言いますが、この写真の場合、葉の先端の方向性に従い、画面を構成しています。二枚の葉によるバランスとリズムと配分によって、この写真は創られています。

この画面のようなバランス力は、アンテナを立ててものを見るようになると、自然と身につけてくるものです。

とは言っても、写真はどのように撮っても構わないのです。自由に思うがままに撮ればよいのです。でも、目的が**より多くの方に自分の写真を観てもらい、「この写真いいね!」**と言われたいですよね。それには、理由があると前述しました。焦らずにひとつひとつ身につけていきましょう。不思議なことに、ひとつ覚えると、二つ三つと覚えていくのです。それは相互に関連しているからなんです。

写真は、学問ではなくて、スポーツに近いものがあります。頭と身体で行うことなのです。特に身体が勝手に動くというようになったら、もう凄いことになってしまってますよ。

私の「新しいものへの挑戦法」は、最初に「おおすじ」を理解して、細かい部分に入っていきます。途中で分からなくなったら、また最初に戻ります。不思議なことに、そうしている内に分かってくるんです。

# デジタルカメラの使い方

[ テキスト 32 - 51 ]

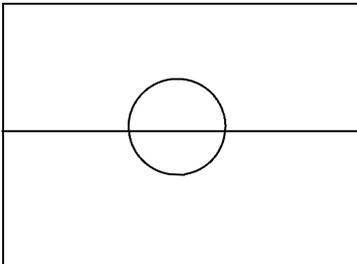
## ■ コンパクトデジタルカメラの使い方



「ピンボケよさようなら!」でも少し説明しましたが、基本は、しっかりホールドし、手ブレを起こさないことです。そうすると、「手ブレ補正機能」がついていなくとも手ブレを防いで撮ることができます。

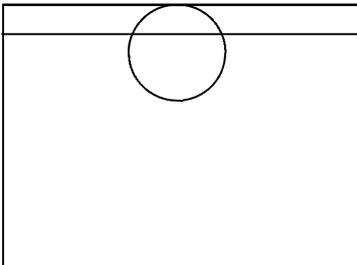
そして、ここでは「**初心者がつい撮りがちな失敗写真をしないためには**」、というコンセプトで説明しましょう。

### ・ど真ん中構図からの脱却

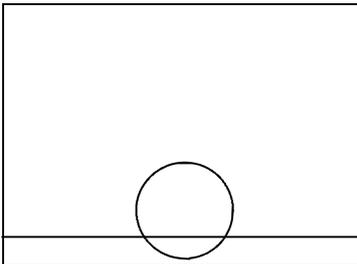


左の図は、ど真ん中パターンです。写そうとするものがど真ん中だと、周りの空間が遊んでしまいます。このとき、写真の構図で解説しました「**主役と脇役**」を思い出してください。どれが主役でどれが脇役? を決めれば自ずとど真ん中から外れます。

露出を測るとき、ピントを合わせるときは、真ん中で測り、シャッターボタン半押しのまま画面構成に移ります。



左の図からイメージしてください。海の水平線とします。下に大きく配分したのは、海です。これだけ配分したということは、この写真の主役は海だということが分かります。○は海に沈む太陽ですね。



左の図からイメージしたら、今度は、「主役は太陽と赤い雲(空)」です。その画面配分で分かります。

要はこの写真を観る人が、「ハッキリ!ん!これだね」と分かる写真ということなのです。



この写真は、雲の配分を多くし、まるで槍ヶ岳が煙を吐きながら進んでいる機関車のような「ユニーク」なイメージで画面構成したものです。

画面を見ていただくと良く分かると思いますが、この場合の主役は「雲」で、脇役が「槍ヶ岳」です。

まず、ど真ん中構図とさようならしましょう。それだけで、いきなり写真力アップです。